

留萌



RUMOI CITY



留萌市は北海道中央部西端に位置し北西部は日本海に面している。北緯43度、東経141度、面積は297.51km²である。地形は留萌川を境界として、その北部と南部で異なった様相を示し、硬質の地層が分布する南部の方がやや高峻である。本地域は山地、丘陵、段丘及び低地から構成される。その大半は丘陵地で占められ、南部では特に山地が発達している。一方、段丘や低地は河川沿いや海岸部に分布している。



留 萌 市

人口

24,249人
(平成 24 年 1 月末現在)

面積

297.51km²
(平成 23 年度版留萌市統計書より)

市の花

ツツジ
(昭和 52 年 10 月制定)

市の木

アカシア
(昭和 52 年 10 月制定)



水平線上に左から天売島、焼尻島、利尻山が浮かぶ留萌市の夕景

目 次

留萌の四季 P1

留萌の文化 P5

留萌の名所 P11

留萌の歴史 P19

留萌ゆかりの人 P39

留萌のイベント P43

留萌の特産品 P47

これからの留萌 P51

別添／留萌管内手書きまっぷ オロロンまっぷ
(留萌市編)

春

くき ニシンの群来を願う春



春告魚「ニシン」が浜に姿を見せる。留萌の春である。

春先のどんよりと曇りがかった朝、ニシンの大群が浅瀬に卵を産みつける。いつしか地元では「鯨曇り」と呼ぶようになった。留萌からニシンの大群が姿を消して50年あまり。地元漁師は大群のニシンが再びこの浜に戻ってほしいとの願いをこめ、網を刺す。

山の雪が解け始めると山菜が顔を出し、5月には田植えが始まる。最盛期は家族総出の作業となる。留萌千望高校生が開発した「にしん飯」は、ニシンの甘露煮を押し寿司にした一品。市内の留萌寿司商組合各店で食べられる。ニシンの群来に思いを馳せながら味わいたい。



田植え



ヤチブキ



にしん飯

夏

海に祭りに燃える夏



留萌の夏は海開きで本番を迎える。6月下旬のオートキャンプフェスティバルを皮切りに、7月中旬から8月中旬にかけて「ゴールデンビーチるもい」がオープンし、札幌や旭川などからも海水浴客が訪れる。留萌三大夏祭りの最後を飾る「るもい呑濤まつり」。行灯が市内中心部を練り歩き、花火が夜空を焦がす。

夏の味覚と言えば「ウニ」。キタムラサキウニとエゾバフンウニの二種類が獲れる。7月に「うにまつり」が行われ、留萌寿司商組合各店で地物のウニを堪能できる。「うまいよ！るもい市」はウニの袋詰め放題が人気で行列ができるほどだ。



夜空を焦がす行灯（るもい呑濤まつり）



ウニの袋詰め放題（うまいよ！るもい市）



ウニ丼

秋

恵みをいただく秋



黄金色の絨毯を敷き詰めたような風景が広がる秋は、収穫の季節だ。留萌管内南部で収穫される南るもい米の「ななつぼし」は、過去に全国米・食味分析鑑定コンクールで金賞の実績を誇るなど、留萌の米の美味しさは評価が高い。今年も農家の人達に感謝しながら新米をいただく。

神居岩総合公園の木々の葉が色づきはじめる秋。まだ緑のまま残っている葉と赤や黄に色づいた葉の絶妙なコントラストが、美しさを増す。海では秋サケが長い旅を終え、生まれた川へ戻ってくる。宝石のように輝くイクラをほかほかのご飯に乗せたイクラ丼は旬のご馳走だ。



神居岩総合公園の紅葉



秋サケ魚の様子



イクラ丼

冬

けあらし

気嵐が立ち昇る冬



留萌の冬はとても厳しく、荒れ狂う波が押し寄せる日々が続く。時折「気嵐（けあらし）」と呼ばれる現象に出会える日がある。寒くほとんど風のない穏やかな日に、海から湯気のような蒸気が立ち上がる現象だ。漁師たちは気嵐のなか漁の準備をし漁場へ向かう。

かつてニシン漁で栄えた留萌。現在はカズノコ生産量日本一のまちだ。12月はカズノコ出荷のピークを迎え、各水産加工場では黄色いダイヤと呼ばれるカズノコを化粧箱に詰める作業に追われる。また、ニシン漬は寒さが厳しくなるこの時期に漬け込む保存食だ。



荒れ狂う留萌の海



カズノコを化粧箱に詰める作業



ニシン漬



旧留萌佐賀家漁場

留萌の文化

留萌の文化を象徴するもののひとつにニシンがある。

江戸末期から明治、大正、昭和と百年以上にわたり、ニシン漁が人々に与えた恩恵は暮らしや文化、芸能、建造物に色濃く残っている。その最たるものは留萌市礼受町に現存する旧留萌佐賀家漁場である。

ニシン漁場建築と漁労用具一式は国指定重要有形民俗文化財に指定され、留萌市に限らず北海道の貴重な産業遺産である。

留萌の文化財

旧留萌佐賀家漁場

国指定重要有形民俗文化財・国指定史跡

留萌市から増毛町に向かう国道231号線。礼受漁港を過ぎた山側に因(カクダイ)という屋号が書かれた青いトタン張りの「トタ倉」が目に入る。手前に番屋、背後の山には小さな社、「船倉」や「網倉」もある。海側には生のニシンを一次的に保管する「廊下」や、ニシン船も残されている。ニシン粕を炊いたかまどの跡もあり、船揚げ場の浜には岩盤を掘り下げた航路が沖に向かって続いている。これらは江戸時代末期、弘化元年(1844年)に佐賀家八代目佐賀平之丞が開き、昭和32年(1957年)まで113年間ニシン漁を営んだニシン漁場の貴重な姿だ。

旧留萌佐賀家漁場の漁労用具3,745点は平成7年(1995年)に国指定重要有形民俗文化財に指定され、その後漁場全体が平成9年(1997年)に国指定史跡に指定された。平成13年(2001年)には北海道遺産に登録され、近代北海道のニシン漁場経営の姿を今に伝えている。



ニシン漁労用具「もっこ」船からニシンを入れて背負う木箱



佐賀番屋の前浜に残る船揚げ場の跡



夏の一時期に一般公開されている番屋。
市職員による解説がある(2009年8月の様子)



彩色が施されたニシン漁に使われた船。船倉も夏には一般開放される

因佐賀家とニシン漁労用具

佐賀家は現在も青森県下北郡風間浦村下風呂に続く家柄である。

天保11年(1840年)にハマシケ(浜益)以北での一般漁民のニシン出稼ぎが許された4年後の弘化元年(1844年)に、礼受にニシン場を開いたのが佐賀平之丞である。平之丞は出稼ぎ漁民であったが、場所請負人である栖原家の許しを得てニシン漁場を開いた。

佐賀家漁場の特徴は、番屋と付属建物としての倉庫群、また仕舞われていたニシン漁労用具に象徴される。ニシン製品を保管する倉庫「トタ倉」

は明治36年(1903年)の建築。トタ倉の通称は創建時からで、建物側面を総トタン張りにしたことから呼ばれた。北海道北西部では珍しい瓦葺きの屋根で軒瓦には屋号が入っている。線路を挟んだ裏山には漁業信仰の対象であった「稲荷社」も残されている。

また、ニシン漁具や加工用具の多くが残されている。昭和32年(1957年)の漁を終えた後も翌年に備え、その後もニシンの再来を信じ、売却や処分をせずに保存されたためである。現在、北海道内にこれほど往時のニシン漁場景観を残しているものはない。

ひよりやま のろしだいあと 日和山・烽火台跡

市指定文化財

留萌市内の景勝地、黄金岬を見下ろす高台「海のふるさと館」敷地内にある。江戸時代末期、北前船(弁財船)の出港時に風向きや気象を観測したり、煙や火を焚き船に位置を知らせる「灯台」として使われていた場所である。平成11年(1999年)市文化財に指定。

北蝦夷地や東蝦夷地に異変があった場合、伝令の烽火をあげた場所でもある。



かつて日和山と呼ばれていた場所。開拓期の貴重な史跡を石碑が伝える

留萌市開基百年記念保護樹木

市指定

留萌湊神社(大町3丁目)のとなりにある一本の樹木(樹齢約130年)。明治10年(1877年)留萌開基の年からあり、昭和52年(1977年)に留萌市開基百年を記念し保護樹木に指定された。樹高6m以上、幹の直径は34cmを超える。風雪に耐え留萌の発展を見守っている。

留萌の文学

創造の軌跡

留萌で最も古い文化団体の記録は大正時代初期、林四越（千秋）が結成した「フイの会」である。同人句集「九楽」を刊行したとされている。

また、大和田駅の菅虚穂、石黒天溪らが「俳句同好会」をつくり研究作句をしていたという。漁場への人の流入や開校した留萌中学校教職員らが美術などを中心に芸術文化の活動に火をつけ、大正末期から昭和初期にかけ相次いで文化団体が結成された。

現在も文学、演劇、美術、音楽、民謡、謡曲、詩吟、三曲、日本舞踊、バレエ、茶華道と留萌の文化活動は発展を続けている。

留萌文学 留萌ペンクラブ

昭和30年（1955年）、小樽ペンクラブの創設に深くかかわった画家の国松登の来留をきっかけに留萌ペンクラブが誕生。翌年、総合文芸誌「PEN」が創刊された。昭和39年（1964年）第30号から誌名を「留萌文学」と改題し現在に至る。



同人の中から、道内や中央の文学界でも高い評価を受ける作品がでている。丸山靖生「男爵と僕」（第30号）は戦後の開拓農村に生きる青春像を描き「文学界」の新人賞候補になった。

仲財修司「炎の海」（第50号）は俳人の細谷源二をモデルにした力作で、「文学界」同人誌評で激賞された。吉岡康「海からの声」は三船遭難と雄冬空襲をテーマに、昭和48年（1973年）北海道新聞文学賞佳作に選ばれた。

山路ひろ子

平成3年「父のカリズ」北日本文学賞

平成5年「風のある街」第12回潮賞（小説部門）

高橋 明雄

平成6年「うらぶる人」北海道文化奨励賞

市民文化誌『波灯』 文化集団波灯の会

市民文化誌「波灯」（文化集団波灯の会）の創刊は昭和63年（1988年）で、港町留萌をイメージし波間に浮かぶ漁り火の灯り、街の灯りを象徴して名付けられた。小説、詩、短歌、俳句、川柳、エッセイ、自分史、郷土史、評論など多彩で、表紙には郷土の版画家阿部貞夫の作品を使った。平成23年（2011年）第24号で終刊となったが、平成10年度北海道地域文化奨励賞に選ばれるなど、地域に根ざした文化誌として評価された。

茶華道

留萌には古くから茶華道の各流派があり多くの門弟を育成してきた。茶道では表千家、裏千家、大和遠州流の各流派がある。華道には華道池坊、専正池坊流がある。大和遠州流は小堀遠州公を流祖とする武家茶道であり、ここ留萌の地で第18代家元蓼沼紫英（たでぬましえい）、第19代家元蓼沼紫水（たでぬましすい）が親子二代にわたり門弟育成に精魂を傾けた。紫英は明治43年（1910年）の留萌本線開通のその日、幼子の手を引き留萌の地に降り立ち、居を構え庵を開いた。当時の留萌はニシン大漁に沸き、裕福な階層や洗練された茶華道の教授を求める人々が増えていた時代であった。茶華道は、留萌の文化の灯の役割を果たしたともいえる。



第18代家元 蓼沼紫英



第19代家元 蓼沼紫水

第18代家元蓼沼紫英は、少女時代に肖像画家を志し横浜で勉強、その後仙台で油絵を習得したといわれる。留萌で本格的に絵を描き、展覧会へ出品、発表活動が続けた留萌初の絵画制作者と推測されている。昭和28年（1953年）第1回留萌市文化賞を受賞している。

留萌の文化活動

留萌市民の文化活動は個人・団体ともに裾野は広く、美術では毎年秋に開かれる公募展「萌美展」があり、留萌管内を代表する美術展として定着、大作の出品も少なくない。移動展も行われている。

音楽分野では、各小中学校吹奏楽部の活動が活発であり、近年は留萌高校マーチングバンドが全道・全国大会へ出場を果たしている。留萌市民吹奏楽団や留萌混声合唱団の定期演奏会、歌謡曲、ジャズなどジャンルを問わず地元ミュージシャン達によるライブ活動も活発だ。

特定非営利活動法人留萌市文化会議が開催する市民芸術祭には例年多くの団体が参加している。

留萌の郷土芸能

伝統を 未来へ

かつて留萌にはいくつかの神楽が受け継がれていた。タルマップや幌糠などの農村部では入植者らの故郷である富山、越中五箇山に伝わる神楽が伝承された。礼受などの沿岸部ではニシン漁場で働く人々の出身地から南部神楽が伝わった。

神楽のほかに留萌の郷土芸能に太鼓がある。昭和50年代には藤山地区に藤山少年太鼓が発足し、当時、児童らがオリジナル曲を演奏して郷土に活力を与えた。現在2団体が活動している。

留萌諺沖揚音頭は昭和34年(1959年)に富山市で開催された全国郷土民謡舞踊コンクール大会で北海道代表として出場した民謡愛好会「北誉会」によって初めて発表された。その後、郷土芸能として保存継承すべく船漕ぎ唄、網起こし唄、ソーラン節、子叩き唄の経過と解説、朗読、踊りを取り入れた『舞台構成・諺沖揚音頭』が発表された。

留萌岩戸神楽

大正10年代に青森県下北半島からニシン漁へ出稼ぎに来ていた人々が中心に伝えたとされる。獅子は二頭だて。



留萌神社境内にて神楽の奉納

南部神楽を今に伝える留萌岩戸神楽保存会は昭和40年(1965年)に発足。

留萌神社例大祭(7月16日～18日)での神楽奉納と「門打ち」で祭りを盛り上げる。

留萌黒潮太鼓

昭和41年(1966年)、市民有志により結成。オリジナル曲は「激流暑寒太鼓」「留萌の四季」「北海駒牧太鼓」「岬の鼓動」「真の心」の5曲がある。

ジュニアの活躍がめざましく、親子二代で在籍する会員もいる。市民芸術祭へ参加するなど精力的な活動を行っている。



息の長い活動が続ける

留萌千望太鼓

昭和54年(1979年)発足。陸上自衛隊留萌駐屯地第26普通科連隊隊員有志で構成。駐屯地が主催する音楽まつりや、市内外のイベントではダイナミックな演奏が市民にも親しまれている。オリジナル曲に「波濤」「雷鳴」がある。



勇壮な演奏で魅了



千望台

留萌の名所

日本海に面した留萌市は目前に広がる海を背景に数多くの景観を楽しむ。「日本の夕陽百選」に選ばれた黄金岬をはじめ、留萌の歴史とともに歩んだ留萌港、市内を一望できる千望台など数々の見所がある。

留萌西海岸 の変遷

黄金岬は昔、アイヌの人々から「セモシ」または「ムクルタウシ」と呼ばれていた。「セモシ」は「ひじのように曲がった」、「ムクルタウシ」は「粟の糠が山のようになった岬」という意味を持つ。

現在黄金岬は自然を生かした磯浜の公園となっている。夏には岩礁に渡る栈橋も設置され、道路沿いには喫茶店や海の家が立ち並んでいる。

留萌西海岸の海水浴場は明治45年(1912年)開業の瀬越海岸海水浴場にはじまり、浜中海水浴場、ゴールデンビーチるもいへと移り変わる。浜中海水浴場は現在、マリンレジャーを楽しめる海浜公園となっている。

黄金岬

MAP (P18) - ①

留萌の景勝地のひとつに黄金岬がある。柱を積み重ねたような荒々しい奇岩が、幾つも並ぶ独特な景観を持つ海岸だ。沖に沈む夕陽はすべてのものを染め尽くし、その眺めは「日本一の落陽」とされる。かつては「千石場所」としてニシンを満載した船が黄金色(こがねいろ)の沖を往来し、まさに黄金(おうごん)をちりばめたような海であった。豊かな恩恵を与え、「一起し千両」の夢を秘めたこの浜を「黄金岬」と呼ぶようになった。

一帯を形づくっている岩礁(岩場)は学術的には「カンラン石玄武岩柱状節理」といい、層雲峡の大函(おおぼこ)や、根室の車石(くるまいし)などと同種の石質である。今から300万年前に、地球の内部から地表の弱い所を通り、溶岩が吹き出したもので、縦に筋目の通った珍しい岩石である。海面からは頭の部分しか見えないが、「はなれ岩」や「たて岩」と呼ばれる岩の海面下は切り立った絶壁になっている。叩き付ける冬の強い波は、十数メートルにも立ち上がり「世界三大波濤」と言われている。



「日本の夕陽百選」に選ばれた黄金岬の夕陽



カンラン石玄武岩柱状節理の岩礁

江戸時代末期に烽火（のろし）台として利用され、弁財船（北前船）などの日本海航行に重要な目印であった「黄金岬」。その高台に平成元年（1989年）にオープンした社会教育施設。無料の常設展示室には、留萌と日本海や大陸との関係を示す化石資料、アイヌ文化遺産北海道縄文文化遺跡、かつてのニシン漁の繁栄を記録した写真や漁具などを見学できる。

留萌出身の作曲家、故佐藤勝氏のピアノや資料を展示している。2階にはライブカメラが設置され黄金岬に沈む夕陽をインターネットで見ることができる。

（下記アドレス参照）

海のふるさと館のあたりは、かつて弁財船が出港する時に気象条件を見る日和山と呼ばれていた。

「日和山と烽火台跡石碑」が往時を伝える。また、昭和27年（1952年）故高橋九一氏が私財を投じて日和山烽火台に設置した灯台（高橋灯柱）もある。また、太平洋戦争終結後に起きた痛ましい事件「三船殉難事件」を後世に伝えるべく、慰霊碑が建立されている。



テラスから見る夕陽は格別



コタンビルが着ていたとされる山丹服
（留萌市海のふるさと館 常設展示）



2分の1サイズに復元された高橋灯台

北北海道の玄関口「留萌港」は古くから石炭の積出し港として栄え、現在は水産物・木材・石炭等の輸入や石油製品・重油・セメントの移入、米穀類の移出を扱う流通港湾として重要な役割を果たしている。

隣接する副港は留萌港完成後の物資流通の円滑化を図る市街地改造計画として立案され、大正12年（1923年）に完成した。留萌港は外港、内港、副港からなる三段式港湾として全国的に有名となった。

その後、昭和26年（1951年）より副港の埋立てが始まり、商業地や宅地となった。現在、副港の水面積は当時の5分の1となっている。副港周辺を留萌のシンボルゾーンとして地域活性化につなげようと、旧北海道合板の敷地を利用したイベントが市内の若手を中心に行われている。

留萌港は市民のみならず多くの人々に親しまれているスポットである。昔ながらの石造り倉庫群が並ぶ南岸では、食のイベント「うまいよ！るもい市」が開催されている。

大町地区ではデザイン灯台「波灯の女」が往来する船の安全を見守り、北岸や古丹浜地区は多くの太公望でにぎわう。古丹浜埠頭や三泊埠頭では大型貨物船や客船が入港している。



巡視船「ちとせ」が停泊している留萌港南岸



デザイン灯台「波灯の女（ひと）」

松浦武四郎踏査の地記念碑

MAP (P18) - ④

留萌湊神社に隣接する望洋公園内に「松浦武四郎踏査の地記念碑」がある。松浦武四郎は弘化3年(1846年)と、安政3年(1856年)に二度留萌を訪れている。当時は黄金岬の海岸線には路が無く、セモシから高台を越え、留萌川へ出たと思われる。セモシは現在の瀬越(せごし)地区で、セモシ岬が現在の黄金岬にあたる。記念碑は留萌の海岸をスケッチしたとされている地に、140年後の平成7年(1995年)建立された。



望洋公園内にある松浦武四郎踏査の地記念碑

まつうらたけしろう

松浦武四郎 (1818年～1888年)

幕末から明治にかけて活動した探検家で、蝦夷地に6回渡航、探査し北海道の地名を考案した。

「武四郎廻浦日誌」「再航蝦夷日誌」「東西蝦夷山川地理取調図」などに当時の蝦夷地についても事細かに記録されている。

ゴールドンビーチるもい

MAP (P18) - ⑤

平成12年(2000年)に誕生した留萌市の海水浴場。3kmにわたり砂浜の海岸が続く。南に暑寒別岳連峰と礼受漁港を臨み、北に黄金岬を見る静かな内海に位置している道北最大級の海水浴場。

海開き前の6月下旬にキャンパーの祭典「オートキャンプフェスティバル」を開催、7月上旬にはビーチバレーボール大会が開催される。



オートキャンプフェスティバルには全国各地より大勢のキャンパーが来る

豊かに 自然満喫

留萌は海のマチであると同時に里山の自然にも恵まれている。雪解け後、春の山菜採り。夏は青々とした木々を望みながらの森林浴。秋の紅葉とキノコ狩り。冬は神居岩総合公園でのクロスカントリースキーなど、四季ごとに楽しめる。

千望台

MAP (P18) - ⑥

留萌港を中心に市街地を一望することができる千望台は海拔180mのなだらかな丘陵地帯。沖合に天売・焼尻両島、南に、暑寒別岳の峰々を望む。日本海に沈む夕陽の美しさも眺めることができる。

また、留萌隆盛の礎を築き「留萌港開発の父」といわれる留萌市特別功労者「五十嵐億太郎」の立像と、五十嵐億太郎翁彰徳碑がある。五十嵐億太郎は留萌港の誘致活動を行い、留萌発展にその生涯を捧げた人物として語り継がれている。

敷地内にあるログハウス風の休憩施設「サンセット千望台」では、食事ができる。展望室からも留萌の街並みを眺められる。

千望台の奥に広がる「ルルモッペ憩いの森」。「春の森」「秋の森」「小鳥の森」など13の森からなる。ウグイス・クマゲラ・ムクドリなどの野鳥を観察できる。春にはマイズルソウ・ヤマブキなどの美しい花々が咲く。散策路ではダケカンバ・ナナカマド・ハンノキなどの森林浴も楽しめる。樹齢四千年までも萌え栄えるようにとの願いを込め「千望樹（せんぼうじゅ）」と名付けられたミズナラ（推定樹齢400年）の大木がある。



留萌港を見つめる五十嵐億太郎翁立像



「ルルモッペ憩いの森」内にある「池の森」

礼受牧場

MAP (P18) - ⑦

かつて牧場として使用されていたが、平成11年（1999年）に一般開放された。背後には10基の風車、眼下に青い海が広がる。6月初旬から菜の花が一面に咲き誇る。敷地内の「トリム」では地元の農水産物をバーベキュー（要事前予約）で楽しめる。



6月上旬に菜の花まつりが行われる

かむいわ

神居岩総合公園

MAP (P18) - ⑧

留萌市街地から東へ約5kmの山あいに造られた神居岩総合公園。フィールドアスレチックやキャンプ場、パークゴルフ場などを備えている。公園内には市の花に指定されている「ツツジの森」や、「二十一世紀の桜の丘」、すぐそばに明治時代開湯の温泉「神居岩温泉」もある。



道北一の桜の名所を目指して植樹が始められた二十一世紀の桜の丘

姉妹星の碑

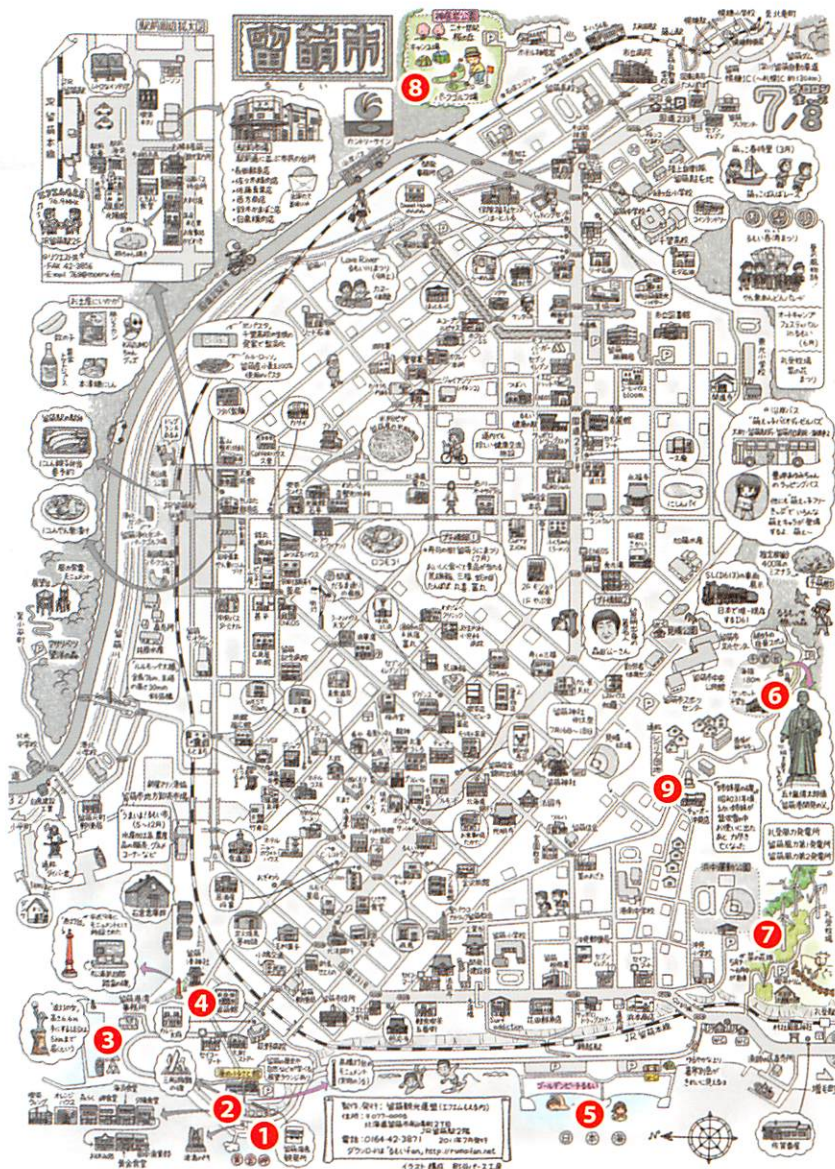
MAP (P18) - ⑨

昭和31年（1956年）2月3日の夜、この付近に住んでいた二人の姉妹が、吹雪のなか街まで使いに出た帰り、我が家を目前にして雪の中に倒れ、翌々日に至るまで発見できなかったという痛ましい事故が起きた。二度とあつてはならない悲しい出来事を語り継ぐと、「姉妹星の碑」が建てられた。

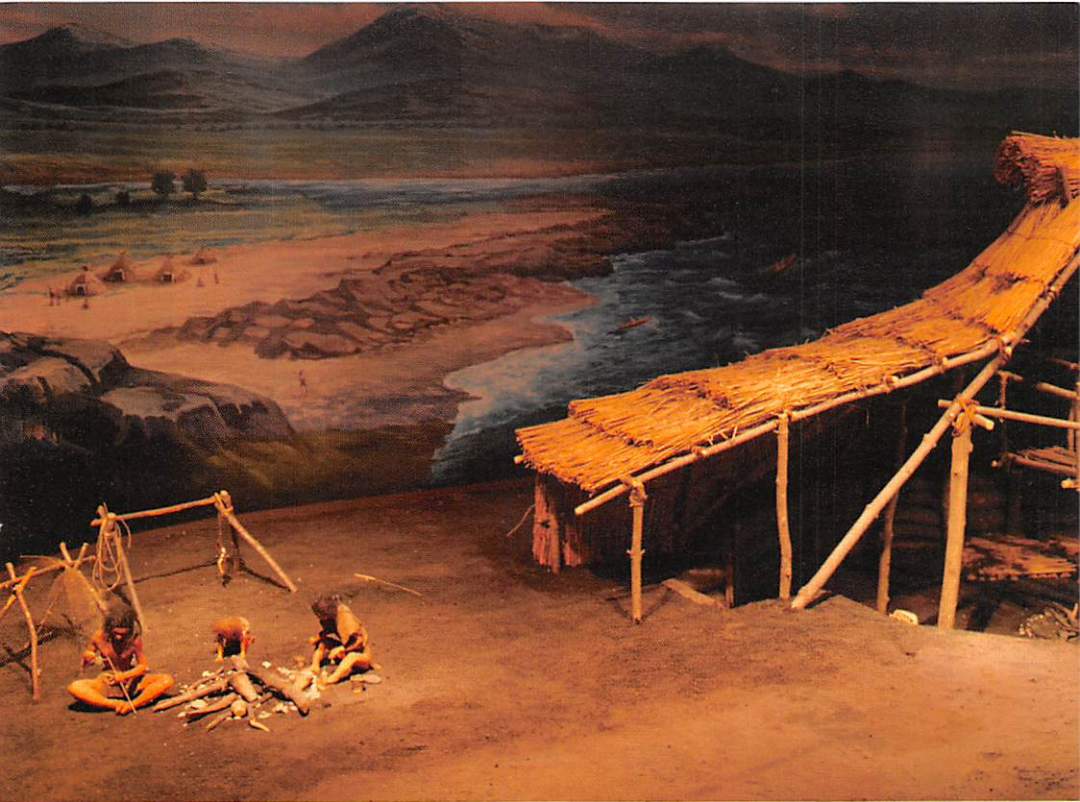


沖見町の住宅街に建てられた姉妹星の碑

留萌市の名所MAP



- | | | |
|--------------|----------------|-----------|
| ① 黄金岬 | ④ 松浦武四郎踏査の地記念碑 | ⑦ 礼受牧場 |
| ② 留萌市海のふるさと館 | ⑤ ゴールデンビーチるもい | ⑧ 神居岩総合公園 |
| ③ 留萌港 | ⑥ 千望台 | ⑨ 姉妹星の碑 |



三泊村のくらし（留萌市海のふるさと館常設展示）

留萌の歴史

留萌がルルモッペと呼ばれるずっと昔、今から七千年ぐらい前の縄文時代初めころ、三泊の高台に留萌で一番古く人の住んだ跡がある。三泊遺跡と呼ばれている。

気候は最後の氷河期が終わり、だんだんと暖かくなっていく途中であった。氷河時代、大陸に積もっていた氷が解け始め海水が増し、現在よりも十数m海水面が上昇した。そのため、三泊の高台のすぐ下が波打ち際であったろうと思われる。

海岸から少し奥に入ると落葉広葉樹や針葉樹の入り混じった林があり熊、鹿、兎などの獣たちも多くすんでいたと考えられる。そんな海岸と林の中間の開けた草原に家を建て、人々は暮らしていた。当時の家は、地面に穴を掘り、その上に草葺きをした竪穴式住居だった。

留萌の語源 ルルモッペ

留萌という地名はアイヌ語の「ルルモッペ」に由来する。語源については、諸説あるが最初にルルモッペの語源について書き残したのは上原熊次郎というアイヌ語の通訳である。彼の著書「蝦夷地名考并里程記」の中で「ルルモッペ 夷語ルルモヲモッペの略語なり、即ち潮の静かに入る所と訳す。満潮の節此川へ潮の入る故此名ありといふ。」と書いている。

「留萌」と言う地名が公式に定められたのは、明治2年（1869年）8月15日のことである。

留萌のコタン

現在の元町、別名はコタン浜。江戸時代、留萌がまだルルモッペと呼ばれていた頃のことである。ルルモッペには多くのアイヌの人たちが住んでいた。そして三つの大きな村（コタン）があった。一つはレウケコタン（礼受）、もうひとつはルルモッペコタン（留萌）そして、ウスヤコタン（臼谷）である。人々は、元町にある一番大きなルルモッペコタンをただのコタンと呼んだ。このコタンには、この地方で最も家柄のよい財産持ちの村長（むらおき）にコタンビルという名のものがいた。18世紀の終わりごろから19世紀の始めにかけて活躍した人である。いろいろな逸話が当時の和人の書いた書物に出てくる。

武藤勘蔵という人の書いた「蝦夷日記」には、蝦夷地でも有名な財産家の一人であると書かれている。それを裏付けるがごとくコタンビルの肖像画が残っている。往時のアイヌの人たちの中でその面影を知ることができる唯一の人物である。これをみると、中国から渡来した蝦夷錦といわれる



コタンビル肖像（天理大学付属図書館蔵）

服を着て、腰にはりっぱな太刀を帯び、皮の脚絆、靴も大陸から渡来したものと考えられ、手にはキセルとアイヌ彫タバコ入れを持ち、威風堂々たる姿である。昔日の留萌地方の繁栄の様子が偲ばれる肖像画である。このコタンピルの家系が、代々留萌地方の村長として元町のコタンに本拠をおき、他のコタンの村長たちのリーダーとして君臨していたのであった。

ルルモッペ場所の創始

ルルモッペ場所の創始は慶長年間（1596年～1614年）ともいわれているが、場所請負人がルルモッペ場所を請け負って本格的な場所経営を行うようになったのは、寛延3年（1750年）のことである。初代村山伝兵衛がルルモッペ場所の請負人となり漁業を営むようになった。

能登商人である初代村山伝兵衛は、交易だけでなく、蝦夷の交易産物を請負人自らが収獲する方向へと変えていった。伝兵衛は、アイヌの人たちを集めて漁網や製法、漁獲の方法について技術指導を行ない、漁具の改良にも力を注ぎ、場所の生産力を高めると共に、さらに和人やアイヌの人たちを使って自らが漁場を経営し、一交易場所に過ぎなかったルルモッペを本格的な漁場へと開発していった。

村山家は三代にわたり、27年間ルルモッペ場所の請負人だった。三代目伝兵衛は、当時の「日本長者鑑」に東の横綱として名があげられている。

最盛期には、蝦夷沿岸の全域に渡って35場所を持ち、それは全場所の50%を占めるもので、大小120艘にも及ぶ輸送船舶を所有し、江戸、堺、長崎の各港と手広く取引をしていた。

天明7年（1787年）三代目村山伝兵衛は樺太に漁場を開発するため、27年間請け負っていた留萌場所を手離した。

天明7年（1787年）

栖原角兵衛 留萌場所の請負人となる

江戸時代、明治時代を通じて留萌と最も関係の深かった家に栖原家がある。代々角兵衛を名乗り留萌の創世期を語る上で欠かせない存在である。五代角兵衛は明和2年（1765年）に初めて松前福山城下小松前町に支店を設け、蝦夷地で商売を始めた。始めは諸産物を江戸に送り販売していたが、房総での漁業の経験を生かし場所請負人となり蝦夷地での漁業拡大の機会をうかがっていた。当時、松前藩の規則から松前の住民でなければ漁業を営むことができなかったため、支店支配人に橋本三郎兵衛を起用し、後に養子とし栖原三郎兵衛として支店を任せた。六代角兵衛の時、念願の場所請負人となった。天明6年（1786年）天塩、天売、焼尻、翌年留萌、苫前をも請け負った。明治2年、場所請負人が漁場持と呼称が変わっても、栖原家の留萌での立場は変わらなかった。その後、留萌と栖原家の関係は昭和10年（1935年）栖原家が留萌を撤退するまで続いた。

すはら

栖原家

栖原家はその祖先を源義家に発し、紀伊国有田村（現在の和歌山県）の出であるという。

初代角兵衛のとき房総（現在の千葉県）で始めて漁業を経営した。

二代角兵衛は、元禄元年（1688年）に漁業のかたわら江戸で薪炭問屋を

始め、元禄13年には江戸深川に材木問屋を始めた。

この材木を扱ったことから三代角兵衛は宝暦年間（1750年代）に南部大畑（青森県下北）に支店を構え、下北の材木を江戸、大阪に送り財をなした。

安政2年（1855年）

ルルモッペ場所 幕府の直轄地となる

安政元年（1854年）江戸幕府はアメリカ合衆国と日米和親条約を締結、開国に踏み切った。下田・箱館（函館）を開き、下田に領事館を置くことを認め、物資の補給をゆるし、最恵国待遇を約束した。

この年、蝦夷地には箱館奉行を置き、翌年蝦夷地を直轄とし、仙台、秋田、南部、津軽、松前の五藩に蝦夷地の警備を命じた。更に幕府は、ロシアの南下に対し強い危機感をもつようになり、安政6年9月には、仙台、会津、庄内、秋田、南部、津軽の六藩に対して蝦夷地の分割領有を命じ、11月には領有地と警備地が各藩に示された。庄内藩には西蝦夷地のうち、ハママシケ、ルルモッペ、トママエ、テシオ、テウレ、ヤングシリが領地として定められた。ルルモッペの陣屋跡は、現在の春日町の奥、マサリベツにあったといわれ、庄内藩が引き揚げた後、明治新政府によって、留萌支庁の官舎として使われたことが知られている。

留萌での庄内藩は北方警備のため、黄金岬の日和山に見張り台や烽火台を設置し、大砲など武器の配備や軍事訓練などを行い警備体制を整え、同時に移民農民を募集して開墾させ、本格的な領地経営を目指していた。

慶応3年（1867年）大政奉還、王政復古、戊辰戦争と日本の歴史が変わる中、庄内藩は朝敵となり慶応4年（1868年）4月5日蝦夷地から総引揚げとなる。



留萌 北海道歴検図（北海道大学付属図書館蔵）

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

明治 2 年～8 年（1869 年～1875 年）

明治時代初期の留萌

新政府は、明治2年（1869年）8月15日の太政官布告で蝦夷地を「北海道」と改称し、北海道に11国86郡を設定した。「北海道」という呼称、国郡の名称や国郡界の設定には、当時開拓使に勤めていた松浦武四郎の意見が大きく作用していた。松浦武四郎の提案を受けて定められた国郡において、留萌郡が設定され、留萌郡を含む「天塩国」には、増毛、留萌、苫前、天塩、中川、上川の6郡が置かれることとなった。

政府の分領支配政策により、留萌郡、増毛郡については8月28日付けで山口藩（山口県）に割り渡された。

留萌支庁の設置

明治4年（1871年）7月14日に行われた廃藩置県の後、北海道全域は、基本的に開拓使によって直接管轄される。翌、明治5年（1872年）9月には「北海全道十一国」と樺太州をあわせて「六大部」に区分し、札幌本庁と函館・根室・宗谷・浦河・樺太の5支庁を置くことになった。留萌はここで宗谷支庁の管轄下に入ることとなった。明治6年（1873年）2月宗谷支庁は、留萌に移され管轄地域はそのまま、留萌支庁と改名された。

留萌支庁の廃止と留萌分署の設置

本庁管轄となり地方行政組織として留萌出張所・宗谷出張所がおかれた。明治9年（1876年）4月、札幌本庁管内の出張所などの出先役所を改めて21の分署が置かれた。それまで、留萌・宗谷の両出張所が管轄してきた地域は6つの分署が置かれることとなった。

明治10年（1877年）1月には増毛・苫前・宗谷・礼文・利尻の5分署は留萌分署と合併され、後の郡役所体制を準備することとなった。

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

明治 10 年～19 年 (1877 年～1886 年)

戸長制度から留萌の開基

各地の村や町に戸長及び副戸長をおき開拓使の行政事務の下請けをさせることとなった。明治7年（1874年）3月に堀内喜八が留萌郡戸長になり、礼受、留萌、三泊、天登雁（現在の広富）、鬼鹿の五村を管轄した。

明治10年（1877年）1月には、留萌の川北（現在の元町）に留萌外二村戸長役場が建設された。現在でいう市役所の庁舎が元町に完成したのである。ちなみに、留萌市の開基はこの時とされている。

留萌外五郡役所の開庁と移転

明治12年（1879年）7月、北海道にも郡区町村編制法が施行され、留萌地方においても分署が廃止され留萌・天塩・中川・上川・苫前・増毛六郡役所が留萌に置かれることとなり、翌明治13年（1880年）3月に開庁している。初代郡長には、一柳平太郎が就任した。

明治5年（1872年）札幌本庁管下札幌病院留萌出張所開設

明治8年（1875年）留萌郵便局開局

明治13年（1880年）留萌小学校設置

教員2人、生徒数32人（男子23人、女子9人）

明治15年（1882年）開拓使廃止

北海道庁の設置と留萌

明治19年（1886年）1月北海道庁を設置。初代長官には、高知藩出身で大判官として開拓使も務め、その後鹿児島県令、元老院議官などを歴任した岩村通俊が就任した。当時、北海道の人口は28万人で、明治20年代を通じて北海道への移民の数は急増していくこととなる。

明治 20 年～24 年 (1887 年～1891 年)

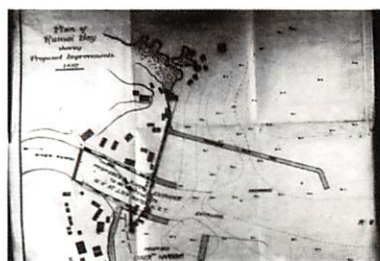
留萌港の生みの親 C.S.メーク (チャールズ・スコット・メーク)

明治20年(1887年)頃、留萌の人口は定住者が300人前後となり、漁業制度の改革以来、独立事業者の増加とともに目立って人口が増加した。この年、北海道庁が招いた英国人技術者C.S.メークは、全道の海岸を調査した。調査の目的は、北海道開拓に不可欠な港湾建設の候補地を選択することであった。C.S.メークの報告書によると「天塩沿岸では、増毛より留萌は未発達だが、もしも120万円かけて留萌海岸を修築すれば良い港になるだろう」と述べている。この一文が、道北の一寒村にすぎなかった留萌の人々に大きな希望を抱かせることとなったのである。

留萌港の請願から着工へ

明治24年(1891年)五十嵐綱治、伊山徳次郎(留萌村戸長)、佐賀庄五郎、勝山孝三ら地元有志は、成立したばかりの大日本帝国議会に留萌築港の請願を行った。しかし、この第二回帝国議会は12月25日、海軍予算の大幅削減が可決されたため紛糾し、政府は我が国の議会史上初めての解散を行った。このため、第一回目の請願は水泡に帰した。ただ、特筆されることは、大日本帝国憲法が制定されてまだ2年、北海道議会等の地方議会制度も整っていなかった明治24年にあつて、中央の議会へ請願を行った事実である。

明治33年(1900年)留萌築港鉄道期成同盟会が組織され、第二回目の請願がなされた。築港は、明治43年(1910年)3月第二十六回帝国議会で可決され、春から念願の工事に着工したのである。留萌の町民は、この吉報に提灯行列、旗行列で祝った。C.S.メークの調査から20年、留萌は戸数837戸、人口3,942人を数えるまでになっていた。



C.S.メークの設計した留萌港
(北海道大学付属図書館蔵)

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

明治 29 年 (1896 年)

藤山の入植開拓

留萌の農業開拓は、明治20年代後半からようやく進行してくるが、転機をもたらしたのは、明治29年（1896年）藤山地区への集団入植である。

留萌内陸部の開拓の父ともいべき藤山要吉が、留萌原野に300町歩の土地の貸し下げを受け、藤山農場を開いた。藤山農場の所在地は現藤山部落十二線から二十三線までで、地主の藤山要吉は小作人にきめこまやかに接した。自由入植と異なり、農場開拓は成墾までの3ヶ年間食糧を支給し、開墾完了者には支給棒引きを行ったようである。しかし、5町歩区画の成墾を入植者すべてが成功させたわけではなく、それだけ開墾は厳しいものだった。

藤山要吉は、明治41年（1908年）には隣接するヌブリケショマップに270町歩の貸し付けを受け牛馬100余頭におよぶ牧場を開設する。こうして大地主の仲間入りを果たすが小作人には温情深く、昭和13年（1938年）藤山農場から小作人を解放する。藤山農場開拓70年にあたる昭和40年（1965年）には要吉の功績をたたえ「藤山開拓之碑」が建立され氏の顕彰文が刻まれている。

ふじやまようきち

藤山要吉

嘉永4年（1851年）古谷多兵衛の二男として秋田に生まれた。

後に、小樽廻船問屋藤山重蔵の手代となり、重蔵に見込まれ養子となり藤山の姓を名のった。

養父の死後、海運業を引き継ぎ更に発展させた。その活動範囲は、道内から大阪、兵庫、北陸、樺太、ロシア領にまで及んだという。

晩年は道内有数の資産家となった。



開拓後の留萌原野（北海道大学付属図書館蔵）

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

明治 41 年～43 年 (1908 年～1910 年)

留萌村から留萌町へ

明治35年（1902年）、二級町村制が施行されるに伴い、留萌は三泊村を分離、礼受村と合併して留萌村が誕生した。これにより、留萌村外二村戸長役場は廃止となり、留萌村役場が統官。地方自治体としての姿が確立されていくことになる。その後、留萌港修築や鉄道敷設の動きにともなって人口も増大し、明治40年（1907年）4月に一級町村制が施行された。

翌年の明治41年（1908年）6月12日、三泊村を合併した留萌村は町制の施行に伴い留萌町となった。この時の人口は14,346人、戸数2,952戸であった。この後、留萌港着工が決定するに伴って、さらに人口が増大することとなる。

留萌線開通

留萌港修築請願が行われてから9年後の明治33年（1900年）、留萌築港鉄道期成同盟会が結成された。この頃、留萌原野（現在の大和田地区周辺）では炭山が開坑された。採炭された石炭は留萌川を船で下って港へ供給され始めていた事もあり、鉄道を開通させ、石炭や物資の輸送を図ることが留萌の経済発展に不可欠であった。

明治40年（1907年）に留萌－深川間約50kmにわたる鉄道工事が着工し、3年後の明治43年（1910年）11月、待望の国鉄留萌線が完成した。一番列車が到着した11月23日、留萌停車場（現在の留萌駅）には、大勢の町民が旗を振って歓迎し、街中を行列するほどの賑わいであった。



明治末頃の留萌駅舎

留萌の発展に生涯をかけた 五十嵐億太郎

留萌港の着工など留萌草創期を語る時に、五十嵐億太郎という人物抜きに語ることはできない。

明治6年（1873年）、青森県下北郡風間村に佐賀庄四郎の五男として生まれた億太郎は、7歳の時、留萌港築港の請願を行った一人、五十嵐綱治の養子となる。養父である五十嵐綱治は、留萌地方に大きな力を持っていた栖原家の支配人をしており、栖原家から独立してからは、留萌から天塩沿岸にかけての随一の資産家として活躍していた。五十嵐綱治は、明治22年（1889年）にC・



S・メークが留萌に調査に来て以来、留萌の港づくりに奔走し、明治24年（1891年）と明治33年（1900年）の二度にわたる帝国議会への請願。また、明治23年（1890年）には留萌新市街化計画のために、私有地13万坪を寄付するなど、着々と留萌港への条件整備を行った。

億太郎も明治33年（1900年）に「留萌築港・鉄道期成同盟」の会長となり、留萌港・鉄道の着工に強力な運動を行った。明治36年（1903年）、養父綱治が亡くなる死の床で、億太郎に「我が五十嵐家は、漁業を基として今日ある事ができた。これも皆、郷土留萌のお陰である。港も鉄道も、これからだが、私が考えていたことを立派にやりとげてほしい」と遺言した。養父の意志を継ぎ、億太郎は港づくりに生涯をかけ、増毛との激しい港の誘致運動に打ち勝ち、留萌港が着工されることになる。億太郎はさらに留萌港の将来を考え、後背地の産業振興のために「雨竜炭田の開発」やそれにとまなう「鉄道の敷設」、及び「港湾施設の整備拡張」を行うための「留萌鉄道棧橋株式会社」を昭和3年（1928年）6月に創設した。これにより留萌港は急速に拡充整備、雨竜炭田は著しく促進され、民営による大留萌建設事業が完成することになる。

留萌港は昭和8年（1933年）に完成するが、億太郎は完成を見ることなく、昭和4年（1929年）12月29日にその生涯を終えた。

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

大正 9 年 (1920 年)

大留萌建設事業

大留萌建設事業とは、留萌築港に伴い留萌町を名実ともに道北の港湾として発展させるため大正9年（1920年）に立案されたものである。概要は、留萌川切替工事、副港築港工事、市街区画整理工事、排水構築工事などである。当時、府や県でさえ50万円の起債を国に認めてもらうことは困難な状況にあった時代に、事業に要する経費250万円をすべて町債で賄おうという計画であった。

不可能とも思われるこの計画が可能となったのは、大正8年（1919年）3月、中央に太いパイプをもつ第6代町長に就任した野本治平の功績が大きい。当時、中央では内相時代に留萌築港に尽力した原敬の政友会内閣が成立。原敬の腹心、高橋光威内閣書記官長の部下であった野本治平が留萌町長に就任したことにより、不可能と思われた町債を実現させてしまったのである。野本町長は就任以来、東奔西走し政財界を動かし、町債250万円は生命保険会社13社の共同出資となった。

大留萌建設事業は、大正11年（1922年）4月着工し、大正13年（1924年）12月完成した。



当時の留萌市風景

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

昭和 8 年～14 年 (1933 年～1939 年)

留萌港完成

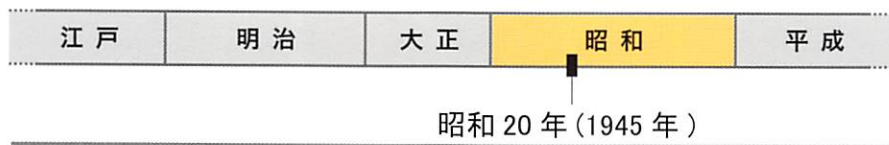
明治43年（1910年）の着工から24年の歳月と国費1,005万963円83銭という巨額の費用を投じ、ようやく留萌港が完成した。幾多の困難を乗り越えて完成した留萌港はこれ以降、空知炭鉱、留萌近郊の天塩炭鉱の石炭積出港としても活躍することとなる。開港時前後の取扱貨物量は飛躍的に増加している。この激増は、南北兩岸の石炭ローダーの完成と密着に関係している。

留萌港は昭和11年（1936年）国際貿易港の指定を受け、中国の汽船「永原丸」が外国船として入港するなど、名実ともに国際港としての華々しいスタートを切った。

北海道人造石油留萌研究所

国の「人造石油事業法」のもとに国策会社として北海道人造石油株式会社留萌研究所が創立された。当時、戦争における石油資源の不足を補うことが急務であった。石炭から人造石油（揮発油）を合成するため、天塩炭田に豊富に存在していた石炭を使用し、出来上がった石油を、こちらで完成して間もない留萌港から積み出しするという想定があった。もちろん、留萌港の利用に精魂を傾けていた留萌町民の熱意も忘れてはいけない。

昭和14年（1939年）に起工した留萌研究所は、翌昭和15年（1940年）10月9日に開所。昭和16年（1941年）1月から人造石油の開発に力を注いだ。2年の歳月を経てようやくドラム缶2本分の揮発油を陸軍に出荷した留萌研究所であったが、戦況が悪化するにしたがい、研究員の戦地派遣による人材不足。そして物資不足による本格的な工場の建設断念などがあり、ついに昭和19年（1944年）10月1日、北海道人造石油株式会社の解散に伴い、6年という短い歴史に幕を下ろした。



留萌空襲

昭和20年（1945年）7月14日から15日にかけて、留萌はアメリカ軍によって空襲を受けた。7月9日、B 29戦闘機2機が留萌へ侵入し、留萌港湾施設ならびに要地偵察を行っていた。この偵察行動後の7月14日、バイカー攻撃隊の艦載機8機が軽空母ベリュー・ウッドから出撃。旭川・深川・留萌の飛行場偵察と攻撃を試みたが、天候不良のため攻撃は免れた。翌15日、やや天候が回復したこの日、留萌も空襲を受けた。午前8時頃、留萌に襲来したアメリカ軍の艦載機は、留萌駅構内の機関車や留萌港の貨物船、民家などを30分にわたって次々と攻撃、2人の死者と数人の負傷者をもたらした。

三船殉難

樺太・千島方面で日ソ両軍の戦闘状態が続いていた8月22日早朝、樺太からの引揚者約5,082人を乗せた引揚船三隻が留萌沖で「国籍不明」の潜水艦による魚雷攻撃を受け、うち二隻は沈没した。死者、行方不明者約1,708人というおびただしい犠牲者がでた。

犠牲となった三船は、

①小笠原丸（1,403トン）

8月22日午前4時20分頃、増毛町別荘沖で潜水艦の雷撃を受け沈没。

②第二新興丸（2,500トン）

8月22日午前5時30分頃、苫前町の沖で潜水艦による魚雷攻撃を受け大破したが、必死に防戦しながら自力で留萌港に入港。

③泰東丸（880トン）

8月22日午前10時頃、小平町鬼鹿沖で潜水艦の攻撃を受け沈没。

留萌港に自力でたどり着いた第二新興丸の惨状は目を覆うものがあったという。留萌市・増毛町・小平町ではそれぞれ三船の犠牲者の慰霊碑を建立。留萌では千望台に建立した後、現在では海のふろさと館の敷地内に移動し、犠牲者の冥福を祈っている。

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

昭和 22 年～33 年（1947 年～1958 年）

留萌町から留萌市へ

昭和22年（1947年）10月1日、町民の悲願であった留萌市が誕生した。町民の市制への気運は明治43年（1910年）に始まる留萌港の修築頃からである。昭和8年（1933年）に留萌港は完成し、人口の増加と産業の振興、都市形態が整ったこともあり、さらに市制への気運が高まるが、太平洋戦争で一時中断。終戦後の昭和22年（1947年）「留萌市制施行促進期成会」が結成され、同年10月1日、ついに市制が施行された。この時の人口、30,057人。戸数6,075戸。全国で212番目、道内では12番目の市の誕生であった。留萌市の初代市長は、昭和22年（1947年）4月の町長選挙で選ばれた原田太八町長がそのまま市長に就任した。

元町大火

昭和33年（1958年）5月23日、連日の好天で湿度33%と極度に乾ききっていた留萌市。さらに春特有のフェーン現象の影響を受け、瞬間風速22mの強風が吹き荒れ、消防本部では火災警報を発令し非常警戒体制をとっていた。午後1時55分、元町2丁目のアパート2階から出火。火は強風にあおられて瞬く間に燃え広がり、風下の木造住宅街を襲った。わずか1時間35分ほどの間に出火元のアパートをはじめ、元町2丁目から5丁目の住宅など181棟、252戸が灰となり、1,235人が焼き出された。幸いにもこの火災で死者は1人もでなかった。留萌市が見積もったこの大火での被害総額は、1億4,000万円であった。



燃えさかる元町地区

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

昭和 33 年～34 年 (1958 年～1959 年)

国鉄羽幌線開通

留萌…深川間に鉄道が開通したのが明治43年（1910年）。その11年後、留萌…増毛間も開通。国鉄留萌線は深川…増毛を結ぶ路線となり、人々の往来だけでなく、ニシンや石炭なども輸送する手段として使われた。国鉄羽幌線は昭和2年（1927年）の留萌…大般間開通を皮切りに、鬼鹿・古丹別・羽幌・築別・初山別と延伸。宗谷線に接続する幌延駅から天塩・遠別と延伸し、昭和33年（1958年）10月18日、ついに国鉄羽幌線、留萌…幌延間141.1kmが全線開通した。しかし、国鉄の膨大な赤字が不採算路線を切り捨てる形となり、羽幌線も第2次廃止路線の対象となる。国鉄民営化前の昭和62年（1987年）3月29日、幌延発の最終列車が留萌に到着し、30年の歴史に幕を閉じた。141.1kmという道内で3番目の長さを誇った羽幌線は、黒いダイヤ（石炭）や黄色いダイヤ（カズノコ）を満載し、昭和の時代を駆け抜けていった。

大和田炭鉱閉山

大和田炭鉱は明治32年（1899年）、青森県人 石田勇三郎と佐藤亀蔵が留萌原野九線でメンコ炭山を開坑し、同じころ留萌原野十線で佐藤喜代治、金澤為也により金喜炭鉱が開坑されたことに始まる。

明治36年（1903年）、それまで羽幌で鯨漁をしていた斎藤知一がメンコ炭山の経営に乗り出し、斎藤炭山と名称を変更。2年後の明治38年（1905年）には有名な敦賀の実業家大和田莊七が経営に乗り出し、金喜炭鉱を大和田炭鉱と称するようになった。

明治40年（1907年）3月、斎藤炭山が大和田炭鉱に吸収合併され、大和田炭鉱株式会社として全鉱区を採炭することとなった。しかし戦後は断層により採炭が難しくなり、エネルギー転換のあおりも受け、昭和34年（1959年）に閉山となった。炭鉱が消えた今でもこの地区の町名と駅名には「大和田」の文字が残っている。

昭和 39 年～44 年 (1964 年～1969 年)

留萌市市章制定

留萌市開基90年、市制施行20年を3年後に控えた昭和39年（1964年）、留萌市の市章が制定された。市章は留萌市の「ル」を図案化し、菱形は一粒の種が固い土を割り、萌え出てきて葉を形づくったことを表わしている。同時に北海道の「北」にも通じ、北海道留萌の発展を願い制定された。



「慶洋丸」座礁事故

昭和44年（1969年）2月5日夜、川崎近海汽船（本社：神戸市）所属の石炭専用船「慶洋丸（3,320トン、23人乗組）」が荒天のため、留萌港北防波堤付近で座礁。当日の天候は、最大瞬間風速30.6m、平均風速20mの風と雪、そして高波の影響で大荒れとなっていた。「慶洋丸」は船体中央部から真っ二つに割れ、船首は海上にマストだけをだして沈没。引きちぎられた船尾の部分が約40度傾いた無残な姿で、岸から150m近くの浅瀬に乗り上げていた。翌6日、巡視船や他の船が救助に向かったが、水深2～3mと浅く座礁の恐れがあり、現場に近づくことができなかった。ヘリコプターも悪天候のため引き返した。事故から3日目の7日、天候も少しずつ回復し、ようやく飛来したヘリコプターが決死の思いでロープを下ろし、乗組員を吊りあげて岸に運んだ。この事故で8人が船内で凍死。救助された乗組員のうち12人が凍傷を負うなど、北海道の海難史上に残る悲惨な事故となった。



座礁した慶洋丸

江戸	明治	大正	昭和	平成
----	----	----	----	----

昭和 46 年～60 年(1971 年～1985 年)

留萌高校野球部甲子園出場

昭和46年（1971年）旭川市営球場で開かれた全国高等学校野球選手権大会・北北海道大会に初出場した織田監督率いる留萌高校は、7月27日の決勝で旭川竜谷高校（現旭川龍谷高校）をやぶり、野球部創設以来初めての甲子園行きの切符を手にした。甲子園での初戦は開会式直後の第1試合、対戦校は県立岐阜商業。試合は4回まで留萌高校今西の力投で岐阜商打線を抑えていたが、5回に取られた1点が決勝点となり、1…0で涙をのんだ。

留萌市民憲章制定

昭和48年（1973年）、留萌市は港を中心に栄える産業都市、豊かで健康な文化都市を実現するため市民憲章を定めた。

- 1、海の資源や山の緑を大切にしておいしい市にしよう。
- 1、人に迷惑をかけず公共の物を大切にしてお清潔な市にしよう。
- 1、きまりを守り、みんなでたすけ合う秩序ある市にしよう。
- 1、働くことによろこびをもって、仕事に精を出し豊かな市にしよう。
- 1、丈夫なからだとかかるい心を持ち、平和な市にしよう。

留萌市観測史上最低気温

留萌における気象庁の観測地点に、留萌と幌糠がある。かつて留萌には測候所が設けられ、気象における観測業務を行っていた。昭和60年（1985年）1月25日、この日幌糠では観測史上最も低い…35.4℃を記録した。留萌でも観測史上最も低い…23.4℃を記録した。この記録は現在も更新されていない。

昭和 63 年～平成 13 年（1988 年～2001 年）

留萌川大洪水

留萌市では昭和63年（1988年）8月25日から、日本海側に停滞した前線の影響で雷を伴った集中豪雨に見舞われ、留萌川が氾濫し、約4,000世帯に避難命令が出された。国道233号線や鉄道が各地で不通となり、住宅の床上・床下浸水や停電も続出した。

留萌市は午後7時30分、災害対策本部を設置し、非常事態招集をかけ、不眠の警戒態勢をとり、災害発生後の処理や避難体制に万全を期した。留萌市の被害状況は床上・床下浸水合わせて3,376棟3,710世帯、被害人員は市の人口の3分の1にあたる9,499人。市内の崖崩れは瀬越町など3ヶ所、地滑り三泊町1ヶ所、農作物・水産加工・商業・工業にも多大な被害がおよんだ未曾有の大災害であった。



洪水時の留萌市街（写真：留萌開発建設部）

45年ぶりのニシン群来

ニシンが留萌沿岸から姿を消して45年経った平成11年（1999年）3月18日早朝、留萌の浜が乳白色に染まった。群来である。付近一帯の海がまるで牛乳を流したような光景に人々はニシンの再来だと喜んだ。

温水プール「ぷるも」誕生

「留萌市に温水プールを」と、水泳などのスポーツ団体や一般市民など千人を超える署名が集まり、平成4年（1992年）9月「温水プール建設促進に関する請願」が採択され、平成13年（2001年）温水プール「ぷるも」が誕生した。平成21年（2009年）3月15日、留萌市の財政健全化計画の対象となり、一時休止している。

平成 18 年～平成 22 年 (2006 年～2010 年)

深川留萌自動車道 留萌幌糠インターチェンジ開通

留萌地域が重点施策として取り組んでいる、食と観光による地域活性化に大きく貢献している高規格幹線道路「深川留萌自動車道」。

この道路は、農水産物の物流形態や観光等による交流人口の増加、高度医療機関との連携などに大きな変革をもたらすものであり、留萌地域の根幹的な社会基盤として必要不可欠である。平成10年（1998年）の深川ジャンクション…深川西インターチェンジ間の開通を皮切りに、平成18年（2006年）11月23日、留萌市の最初のインターチェンジである留萌幌糠インターチェンジが開通した。現在でも大和田インターチェンジの開通が平成24年度に予定されているなど、終着地の留萌インターチェンジに向かい着々と工事が進められている。

るもい健康の駅オープン

平成17年（2005年）留萌市は健康長寿のマチを目指して「健康都市宣言」を行い、平成20年（2008年）3月には「留萌市健康づくり計画」が策定された。住民と医師が一带となった健康づくりを目指す活動「るもいコホートピア構想」を実現させるべく、平成21年（2009年）7月11日、「るもい健康の駅」をオープンした。道内では唯一の「健康の駅」である。

留萌ダム完成

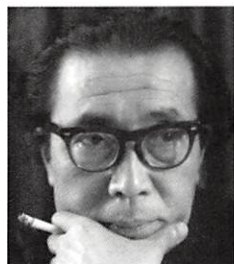
留萌川流域は過去より、たびたび洪水の被害に遭っており、戦後から現在までに15回の洪水被害を記録している。中でも昭和63年（1988年）8月の洪水は、市街地の約3分の1が浸水するなど大きな被害を受けた。こうした洪水被害から留萌川流域を守るため、河川の流出量を調節することを目的とした留萌ダムが平成22年（2010年）3月に完成した。また同時期完成した大和田遊水池とともに流水調節が可能となり、留萌川の洪水に対する安全度が向上すると期待される。



生前佐藤勝氏が使用していたピアノ。平成 19 年ご家族より留萌市に寄贈され、現在「留萌市海のふるさと館」に展示されている。

留萌ゆかりの人

留萌は音楽のまちである。市内には市民吹奏楽団、小・中・高の吹奏楽部、ラテンビッグジャズバンド「イエマンジャー」、アマチュアロックバンド「魔界戦隊獣獅魔都」、「プレビュー」など数々のバンドが活躍している。その根底には、日本映画界を代表する作曲家佐藤勝氏や「宇宙戦艦ヤマト」の作曲者宮川泰氏、「青春時代」の作曲者森田公一氏をはじめ多くの音楽関係者を輩出している土地柄に起因しているのではないかと。その他美術関係やスポーツ選手なども多く生まれている。



明治43年7月12日、東京日本橋浜町に生まれる。生後まもなく陶芸画工の父の元を離れ、留萌の祖父の下に身を寄せた。大正13年3月留萌尋常小学校を卒業後、上京し明治中学校に入学。父から版画の手ほどきを受けるが再度帰郷し、昭和3年留萌中学校を卒業後上京。東京・本郷洋画研究所で洋画を学ぶ。

終戦後、妻を伴い帰郷。四十栄製材所に入社し昭和26年病気のため退社、その間制作活動に入る。昭和25年40歳の時、留萌美術協会設立に参画。この年「阿部貞夫木版画集」創刊号を発行する。昭和26年、留萌光画会々員となる。昭和27年木版画集第2号「彫波」を発行。昭和30年釧路へ移住するが、版画に生きる決意を固め上京し、版画家関野準一郎・刷師平井孝一の指導を受け制作に没頭。貧苦と病苦に堪え、その心魂を版画一筋に傾けて独自の境地を拓いた。昭和44年4月「留萌高校創立45周年開校記念」にて講演。同年7月8日札幌にて心筋梗塞のため59歳で急逝。

平成22年9月「阿部貞夫 生誕100年記念版画展」“いのちの波動”が留萌市中央公民館で開催され、同時に「阿部貞夫版画集」が出版された。



「鯨沖揚」 1962年



「初冬の港」 1966年

作曲家 ^{さとう}佐藤 ^{まさる}勝 (1928年～1999年)



昭和3年5月29日留萌市に生まれる。生家は「日勝亭」という料亭で、幼少の頃より歌舞音曲に親しんで育った。留萌中学校を経て国立音楽学校（現国立音楽大学）を卒業後、故・早坂文雄氏に師事し昭和27年「三太と千代ノ山」を早坂氏と共作し映画音楽デビューをした。以後黒澤明監督の「用心棒」（昭和36年）「赤ひげ」（昭和40年）などをはじめ日本映画を代表する数々の監督たちと計300作以上にも及ぶ映画音楽を担当した。

劇場映画以外にも「大いなる黒部」といった文化記録映画、テレビでは「若者たち」「春の波濤」「太閤記」など手がけている。

日本アカデミー賞最優秀音楽賞3回など多数の受賞歴があり、また長年の映画音楽に対する功績から平成5年には紫綬褒章、平成11年には勲四等旭日小褒章、平成4年には留萌市功労者として表彰された。

作曲家 ^{みやがわ}宮川 ^{ひろし}泰 (1931年～2006年)

昭和6年3月18日留萌市に生まれる。作曲家・編曲家としてテレビ時代の幕開けから不朽の名作を生み日本レコード大賞作曲賞をはじめ多くの賞を受賞。日本ポップス界に大きな足跡を残した。平成18年3月21日急逝。享年75歳。誕生日の3日後であった。平成19年3月留萌市において宮川泰さんを偲び、長男の宮川彬良さんと平原まことさんによる「音♪物語」が開催された。

作曲家 ^{もり た}森田 ^{こういち}公一 (1940年～)

昭和15年2月25日留萌市に生まれる。昭和40年代歌謡界のヒットメーカーで、一時代を築いた。歌手としては「青春時代」「青雲」がCMなどで使用されていた。

歌手
俳優
映画監督 ^{もりお}あがた森魚 (1948年～)

昭和23年9月12日留萌市に生まれる。昭和47年「赤色エレジー」でデビュー。還暦の平成20年に生まれたマチ「留萌」へ帰港。映画監督、俳優としても活躍。

元プロ野球選手 ^{わかまつ}若松 ^{つとむ}勉 (1947年～)

昭和22年4月17日留萌市に生まれる。東光小学校、留萌中学校を卒業後高校野球の名門北海高校へ進学。昭和45年ドラフト3位でヤクルトアトムズ（現東京ヤクルトスワローズ）に入団。19年の長きに渡り活躍し、平成元年引退。ミートのうまさは天才的で高い通算打率を誇り、小さな大打者との異名がある。引退後は同チームで打撃コーチ・二軍監督・一軍監督を務め平成13年には優勝に導いた。昭和53年に留萌市民栄誉賞、昭和56年に道民栄誉賞、平成21年には野球殿堂入りを果たした。

元プロ野球選手 ^{ほん ま}本間 ^{みつる}満
(1972年～)

昭和47年8月25日留萌市に生まれる。平成6年ドラフト3位で福岡ダイエーホークス（現福岡ソフトバンクホークス）に入団。平成21年現役引退。

プロ野球選手 ^{い が ら し}五十嵐 ^{りょうた}亮太
(1979年～)

昭和54年5月28日留萌市に生まれる。平成9年ドラフト2位でヤクルトスワローズに入団。平成22年FA権を行使しニューヨークメッツと2年間契約。

元横綱 ^{きた ふ じ}北の富士 (1942年～)

昭和17年3月28日美幌町に生まれる。その後、留萌市へ移り住み留萌小学校、港南中学校へ入学、当時は野球に熱中していた。近所の相撲ファンに勧められ「出羽海部屋」へ入門。昭和41年名古屋場所後に大関昇進、昭和42年春場所、幕の内最高優勝。昭和44年九州場所、45年初場所で連続優勝し、場所後に第52代横綱となった。昭和49年7月引退。

元オリンピック日本代表 ^{おおたか}大高 ^{とも み}友美
(1976年～)

昭和51年11月21日留萌市に生まれる。平成10年長野五輪、平成14年ソルトレイク五輪、平成18年トリノ五輪にバイアスロンで出場。

元オリンピック日本代表 ^{たけやま}武山 ^{か おり}香里
(1972年～)

昭和47年1月12日留萌市に生まれる。平成10年長野五輪にスノーボード（ハーフパイプ）で出場。



るもい呑濤まつり

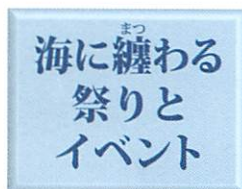
留萌のイベント

ニシン漁に沸いた留萌市には港町ならではの祭が多い。

かつて行われていた「留萌商工港まつり」の流れをくんで、現在「るもい呑濤まつり」が行われている。

陽が沈む頃、大型立て上げ式の大あんどんや中小のあんどんに灯りが灯ると、半被姿の男女や、見物の人々でマチは賑わう。

「雷夜！らいや！」の威勢のいい掛け声と太鼓の音、立ち上がると高さ7mもある大あんどん、「はねと集団」、女みこし「翠蓮会」（すいれんかい）が粋な姿で観衆を楽しませる。沿道を埋め尽くす人々も一体となり、留萌の短い夏を楽しむ。



かつて留萌に春を告げる祭り『やん衆どすこほい祭り』があった。昭和59年（1984年）から15年にわたりマチの青年達を中心に市民手作りの祭りとして留萌市民や観光客に親しまれた。ニシン漁の桹舟を再現し重荷を積み、総重量1トンもの船を10人で引く「やん衆ばんば」が人気を博し、海の男の心意気を伝えた。

昭和62年（1987年）留萌管内9市町村（現在8市町村）を舞台に『日本海オロロンライントライアスロン国際大会』が開催された。

国内最長距離を誇るこの大会では、地元ボランティアスタッフ約2,000人が選手や大会を支えた。

平成18年（2006年）第20回大会で惜しまれながら幕を閉じたが、オロロンラインの知名度を全国に広め、北海道民のトライアスロンへの関心も高めた。

はるまつり 萌っこ春待里 【3月上旬の日曜日】

平成10年（1998年）に幕を閉じた「やん衆どすこほい祭り」に代わる留萌の冬まつりと

して誕生。市民有志で構成する実行委員会とボランティアによる手作りの祭り。「みんなで楽しもう」「みんなの手で創り上げよう」が合言葉。目玉は「やん衆どすこほい祭り」のメインイベント「やん衆ばんば」の流れを汲む「萌っこばんばレース」。

陸上自衛隊留萌駐屯地グラウンドを会場に市内外から多数来場し、留萌に春を呼ぶ祭り。



白熱の萌っこばんばレース

うまいよ！るもいち い市

留萌港南岸にある留萌市地方卸売市場を会場に、留萌の美味しいものが集結する食のイベント。海のマチ留萌

ならではの新鮮な海産物が並び、市内の飲食店も出店する。各店自慢のメニューをその場で味わったり、海を眺めながら海鮮バーベキュー（浜焼き）を楽しめるコーナーも用意されている。春はホタテの袋詰め放題、水産加工品販売が人気。夏のウニの袋詰め放題は順番待ちの行列ができる。12月はカズノコや新巻鮭などのお正月食材が中心となる。購入したものはその場で地方発送が可能。札幌や旭川方面からも新鮮な魚介類、農産物を楽しみに訪れる。



人気アトラクション「ホタテ釣り」

夏を彩る 祭り

留萌の短い夏を彩る留萌三大夏祭り『聖徳太子祭』『留萌神社例大祭』『るもい呑溝まつり』。かつては『留萌商工港まつり』が盛大に行われ、港町ならではの活気にあふれていた。『留萌みなと音頭』に乗り、踊り手が繰り出す「千人踊り」は圧巻であった。「やん衆あんどん行列」「花火大会」で短い留萌の夏は最高潮に盛り上がった。その気風は現在、『るもい呑溝まつり』に受け継がれている。

聖徳太子祭

【6月21日・22日の2日間】

市内宮園町の法国寺境内に聖徳太子堂がある。法国寺には明治37年（1904年）に本山の増上寺から贈られた聖徳太子作と伝えられる阿弥陀如来立像があり、これに機縁して太子堂が設けられた。昭和8年（1933年）当時の大工・指物業組合が建設し完成させた。この年に第1回聖徳太子祭が開催され、現在に至る。法国寺前の坂道には露店が並び、多くの市民が初夏の祭りを楽しむ。



留萌神社例大祭

【7月16日・17日・18日の3日間】

天明6年（1786年）留萌場所の請負人を命ぜられた栖原家が、安芸国（現在の広島県）厳島神社の分霊を懇請して建てられたのが留萌神社の始まりとされている。

最初は留萌川河口の海岸に建てられたが、明治31年（1898年）幸町（現在の市役所横）への移転を経て、大正14年（1925年）に現在の宮園町へ移転した。祀られているのは市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）。

7月16日の宵宮祭に続き17日の例大祭、神楽奉納、本御興が行われる。留萌駅前から神社に向かう市道には例年露店が多数並び、多くの市民が楽しむ。



本御興を担ぐ人、沿道で見物する人、大勢の人々でにぎわう

るもい^{どんとう}呑濤まつり

【7月下旬から8月上旬の週末】

聖徳太子祭、留萌神社例大祭と続く留萌三大夏祭りの最後を締めくくる祭り。

前身は昭和23年（1948年）から始まった「留萌商工港まつり」。海のまちを象徴するように、留萌港を見下ろす高台にある留萌湊神社での式典が行われる。各商店街や団体によるピアガーデンや趣向を凝らしたイベントが市内各所で繰り広げられ、夜には大小合わせて十数基の行灯と数百人規模のはねと集団が目抜き通りを練り歩く。真夏の夜をさらに熱くする祭り。



真夏の夜空を彩る行灯



留萌市街を行灯を先導し練り歩く子ども達

るもい川まつり

【8月下旬から9月上旬の日曜日】

昭和63年（1988年）の留萌川流域での水害による河川改修工事終了記念として平成2年（1990年）から始まる。一級河川・留萌川の河川敷を会場に、市民が水と親しむイベントとして、例年8月下旬から9月上旬に開催されている。近年は水害時のレスキューに使用されるEボートの試乗体験や、スピードを競うEボート大会が目玉となっている。



留萌川の王者を目指す「Eボート大会」



ステージでのアトラクションも充実



カズノコ

留萌の特産品

雪解けの春はフキや笹タケノコなど山の恵みをいただく。

短い夏はタコ・イカ・ウニなど新鮮な海の恵みをいただく。

実りの秋は里の恵み新米をいただく。

寒さが厳しい冬は、飯寿司やニシン漬けなど先人の知恵の恵みをいただく。

留萌管内は自然豊かな土地柄で、季節ごとに海の幸・山の幸など様々な食材を安心して食べることができる。

鯧

春に北海道沿岸に産卵にやってくることから、別名、春告魚とも呼ばれているニシン。

ニシン漁が栄えたのはルモッペと呼ばれていた江戸末期から昭和30年頃までである。当時、漁獲されたニシンは、ニシン粕、身欠きニシン、干し数の子などに加工され、一部は生食用として販売されていた。

加工された製品は、北前船で主に関西方面へ運ばれた。中でもニシン粕は肥料として日本の農業を大きく支えた。昭和32年（1957年）、日本海の春ニシン漁は終わりを告げた。

かつてニシン漁で栄えた留萌地域は、伝統あるニシン加工の技術を活かし、伝統の味を様々な加工品として受け継ぐ。全国一のカズノコ生産量を誇る加工のマチとして評価されている。今でもカズノコは、関西を中心に、おせち料理には欠かせない。

塩カズノコ

カズノコを塩で漬けたもの。薄い塩水につけて塩抜きし好みの味付けをして食す。

味付子持昆布

ニシンが直接卵を産みつけた昆布を用い、味をつけたもの。水産加工場によって味が違う。

松前漬

カズノコにスルメやコンブを合わせ、塩や調味液などで漬けたもの。北海道松前町発祥の郷土料理。

味付カズノコ

塩抜きしたカズノコに味をつけたもの。そのまま食べられる。水産加工場ごとに様々な味がある。

干し数の子

初夏の数週間という限られた期間に天日干しをしたカズノコ。手作りのため生産量が限られる。

やんしゅうまい

ニシンのすり身にカズノコを加え、地元米「ななつぼし」の米粉の皮で包んだしゅうまい。



身欠きニシン



ニシン漬け

本州方面にニシンを運ぶために編み出されたニシンの干物。各水産加工場では、生身欠、本乾身欠、味付身欠など様々な種類が販売されている。

身欠きニシンにキャベツ、ダイコン、ニンジンなどを米麴とともに漬け込んだもの。各家庭でも作られる冬の保存食。

鯧

留萌の水産加工場では、カズノコ以外にもニシンを使った様々な商品が製造されている。米糠に漬けたニシンは、そのまま焼いても食べるが、この地方ではジャガイモ、ダイコン、ニンジンなど野菜と一緒に汁物にした「三平汁」という郷土食もある。

また、市内寿司店では、地元千望高校生が発案した、ニシンの甘露煮と酢飯を押し寿司にした「にしん飯」を食べることができる。お菓子にもニシンの名前を残した「にしんパイ」がある。

ニシンの内臓を取り除き、食塩と米糠で作った糠床に漬けた保存食。米糠に漬けたことで、より深い味わいが広がる。



糠ニシン



留萌にしんソーラン巻

ニシン一匹を丸ごと昆布で包んだもの。



鯧そぼろ

ニシンを3日間煮込んで骨ごとやわらかくし、ほぐしたもの。留萌千望高校生が開発。



鯧切り込み

新鮮なニシンとカズノコ、塩、米麴などで漬けたもの。水産加工場ごとにさまざまな味が楽しめる。



やん衆にしん飯

ニシンの甘露煮と酢飯の押し寿司。留萌千望高校生が開発。



エビ

北海道はエビの主要産地である。その中でも留萌地域は全道一の漁獲量を誇る。留萌沖100kmに位置し海底にある海山、武蔵堆（むさしたい）は、断頭円錐の形をしており、上部は浅瀬で北の日本海において最大にして最高の漁場である。甘エビをPRするため、留萌管内お魚普及協議会では管内小学生から歌詞を公募し「エビマーチ」をつくり話題となった。

米

留萌の米の歴史は、1861年（江戸時代・文久元年）庄内藩主が募集した農民が、現在の留萌市の土地に5年間稲の種子の補給を受け、稲を試作したのが始まりといわれている。

留萌市幌糠地区では、明治35年頃から主に自給自足用の米づくりが始まった。

昔は留萌川の氾濫によって米の収穫も不安定で、水害でまったく収穫できない年も多くあった。管内の稲作は戦後から本格化し、昭和40年代には土地改良事業により用排水路の整備、区画の大型化が進んだ。

生産者の努力により昭和60年代からおいしいとの評価を受けている。

留萌の米

留萌管内では、増毛町から遠別町にかけて米が作られている。

近年、恵まれた気象・土壌条件と生産者の卓越した栽培技術により良質な米が安定して生産され、流通業界からも高い評価を受けている。管内の米は平成17・18・19・20年には4年連続低タンパク質米生産割合全道一に輝いた。

主な品種

おぼろづき

新潟産コシヒカリに匹敵

粘りが自慢の品種。平成17年（2005年）に登場して以来、北海道米ブランドを支える。

ゆめぴりか

甘みと粘りと軟らかさが売り

平成20年（2008年）に登場した品種。北海道米の中で最上級の美味しさを誇る次世代の北海道ブランド米。

ななつぼし

全国食味分析鑑定コンクールで金賞

管内で最も多く収穫される、平成13年（2001年）に登場した品種。冷めても美味しさが長持ちするため、お弁当やお寿司に重宝される。





これからの留萌

明治10年（1877年）、留萌の開基となる戸長役場設置から130年あまり。明治・大正・昭和と時代の変遷の中歴史を刻んできた留萌。

平成となった今、そしてこれからの50年先、100年先の留萌は、どんな未来が待ち受けているだろうか。

「食」「健康」「観光」「子ども」の4つのテーマから、留萌市の未来を展望する。

留萌夢物語

これからの夢に向けて

①食を守り育てるまちづくり

留萌には米、魚介類、野菜など旬の食材が数多くある。特に「カズノコ」は生産量日本一を誇る。留萌市をはじめとする南留萌地域は道内トップクラスの美味しいお米の生産地である。特に「ななつぼし」は全国米・食味分析鑑定コンクールで3年連続を含む、延べ4度の金賞受賞の実績を持つ。

平成19年（2007年）から、農業技術の向上や地産地消推進を図ることを目的に地域の若手農業者グループや生産団体を中心となり、平成22年（2010年）に留萌市食農教育推進協議会を設立した。

自然は、子どもたちが笑顔で暮らし、心や体の成長に欠かせない。農地は食の源であり、水を蓄え、自然を守り、地域に潤いを与える。未来を担う子どもたちが自然と共存し、地域の歴史や文化を大切にすることで、安全で安心な食べ物を口にできる暮らしをこれからも支える。

②健康で笑顔あふれるまちづくり

すべての市民が健康な心と体で、元気に暮らし、活力ある地域社会を目指すため、平成17年（2005年）に「健康都市宣言」を行い、平成20年（2008年）3月に「留萌市健康づくり計画」を策定した。さらに平成21年（2009年）7月に道内初となる健康のための活動を行う施設「るもい健康の駅」が誕生した。市民の健康状態を長期にわたり追跡調査を行う「コホート研究」を通じて、市民みんなが「健康家族」の一員として、さらなる健康で笑顔あふれるまちづくりを進めている。

留萌夢物語

これからの夢に向けて

③笑顔とおもてなしの心で接するまちづくり

留萌の資源は「人」にある。留萌には数々の名所があるが、そこに暮らす人がいて、その存在価値は増す。
私たち市民が、ふるさとの景色や地域の歴史・文化に愛着を持つこと、この地を訪れるひとに笑顔とおもてなしの心で接すること、その一つ一つの行動が「市民コンシェルジュ」である。
今後留萌の食、人、資源を通した既存の観光ツーリズムから、健康という価値観を加えた「ヘルスツーリズム」のマチを目指し、健康で笑顔あふれる留萌の再生につなげていく。ただ見る観光だけでなく、実際に体験してもらう観光も視野に入れ、今後もさまざまな取り組みを行なっていく。

④子どもたちの夢と可能性が育つまちづくり

子どもたちが笑顔で夢を持てる環境を守り、たくましく思いやりのある子どもたちを地域でしっかりと育むための取り組みの一つとして、平成 23 年（2011 年）「カズモあかちゃんの駅」を設置した。

「カズモあかちゃんの駅」は、「おむつコーナー」「授乳室」「調乳に必要なお湯などの提供」「ベビートイレ」「マタニティ駐車場」の内、2 つ以上の設備を要し、妊婦や乳幼児が安心して外出できる環境の整備と、地域全体で子育て家庭を支援することを目的としている。

「カズモあかちゃんの駅」をこれからも増やしていき、子どもをマチの宝として育み、子供たちの夢が育つ可能性を持つまちづくりを進めていく。

地域のメディア・情報発信

留萌地域の旬の情報、観光、イベント、食、暮らし、あらゆる情報を地域のメディアやウェブサイトで紹介している。地域の顔が見え親しみを感じられる情報発信が行われている。

【新聞】

- 日刊留萌新聞(株式会社留萌新聞社)

<http://www2.ocn.ne.jp/~rumoinw/>

【地域FM局】

- エフエムもえる・76.9 MHz <http://www.moeru.fm/>

【ウェブサイト】

- 留萌市 <http://www.e-rumoi.jp/>
- NPO 法人留萌観光協会 <http://rumoi-rasisa.jp/>
- 地域情報サイトるもい fan <http://rumoifan.net/>
(サイト内にて『フリーペーパーるもい fan』をダウンロード可)

《編集にあたり》

〈参考文献〉

留萌市史・新留萌市史・留萌市 HP (留萌市) / 新留萌港史 (留萌開発建設部)
留萌いまむかし (留萌市開基 120 年・市制施行 50 年・開港 60 年記念事業実行委員会)
留萌文化史 (留萌市文化団体協議会) / ガイドブック『留萌』vol2 (2001 年委員会)
阿部貞夫版画集 (阿部貞夫版画集出版委員会)

〈写真協力〉

留萌市 / 留萌開発建設部 / 留萌市教育委員会 / 留萌市海のふるさと館 / 留萌観光連盟
阿部貞夫版画集出版委員会 / 大和遠州流茶道静月流煎茶道 静月会留萌支部
株式会社加藤水産 / 留萌黒潮太鼓 / 陸上自衛隊留萌駐屯地 / 渡辺一夫氏 / 古田智生氏

発行 留萌市

編集 株式会社 エフエムもえる

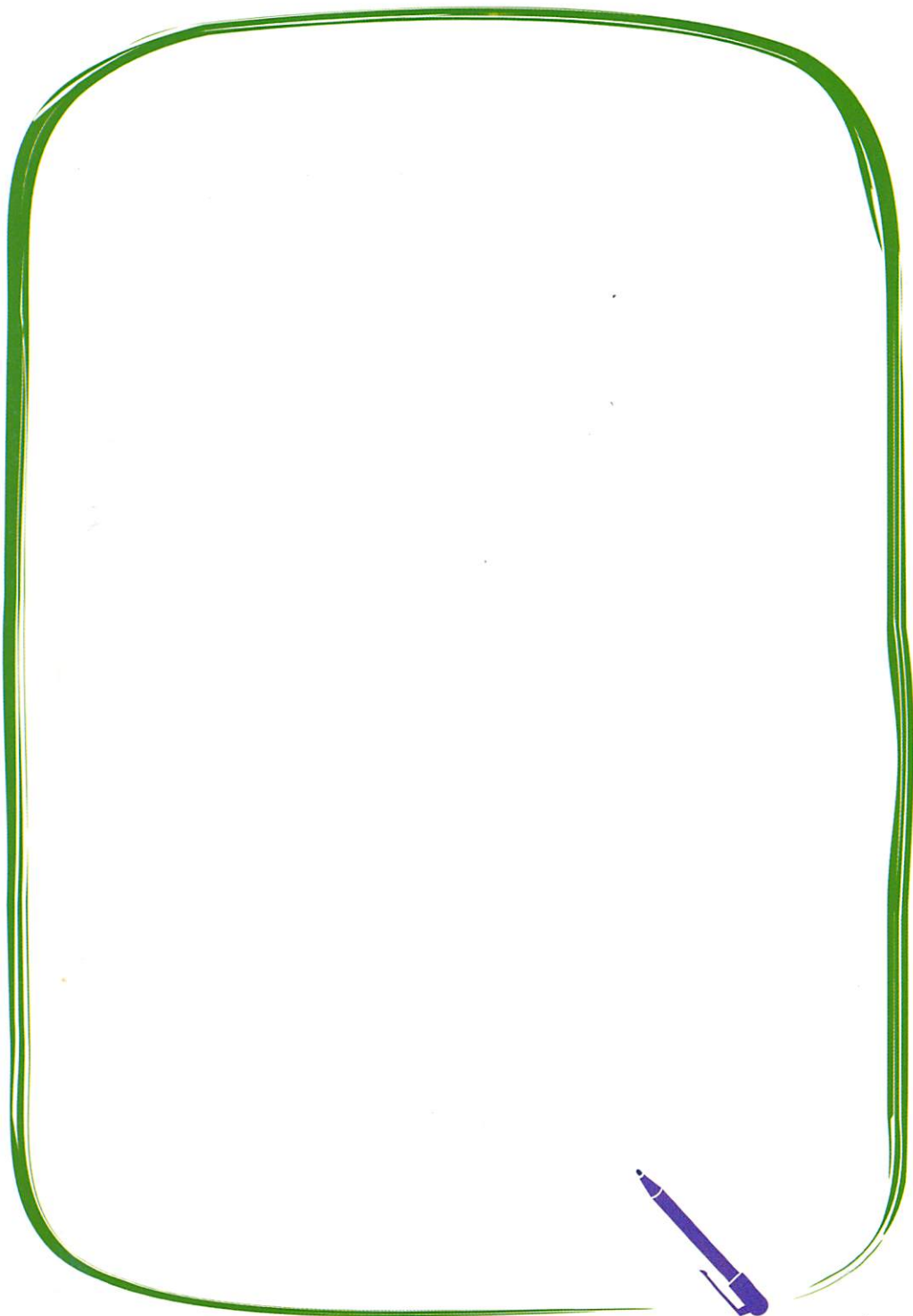
2012年3月 発行

発行所 留萌市役所企画調整課

留萌市幸町1丁目11番地

TEL (0164) 42-1809

平成 23 年度北海道地域づくり総合交付金 (地域再生加速事業) を活用して作成しています。



留萌の未来予想図を書いてみよう

郵送を希望する
方は80円切手
お貼りください

0 7 7 0 0 2 8

留萌市花園町3丁目1-1
るもい健康の駅 行き

るもいオリジナル予防・健診でいきいき健康管理！

るもいオリジナル予防・健診ってなに？

高齢社会を迎え、長年の生活習慣の蓄積による慢性疾患として「**認知症、がん、脳卒中、心筋梗塞**」といった病気が今後、ますます増加傾向となることが予想されます。

糖尿病を代表とする生活習慣病や、その手前のメタボリックシンドロームを検査で早期に発見し、早期に予防に努めることがとても重要です。

一方、留萌の傾向として健診の受診率がとても低い反面、塩分摂取量や脳卒中を発症する割合が、他地域と比べてとても高いというのが、これまでの調査研究で明らかになっています。

このような状況の中、留萌市立病院の笹川院長をはじめ、NPO るもいコホートピアの研究メンバーにより、簡易な問診表タイプの項目を点数化することで、メタボリックシンドロームの危険性を予測し、リスク者に対し効率的に健診誘導を行うために開発しているのが、「**るもいメタボリックアンケート**」です。

また、メタボリックシンドロームの中でも、特に「**危険なメタボ**」の状態や「**隠れ糖尿病**」の状態を見つけて、その人の体質、タイプによる個別指導、改善方法をアドバイスする「**インスリンパワー健診(笹川院長特許)**」も独自に開発し、これらのアンケートから健診の流れで、生活習慣病を早期に発見、改善へと導くのが「**るもいオリジナル予防・健診**」です。

アンケート



&

検査



アンケートへお進
みくださ
い。



折りたた
んで健康
の駅へ。



健康の駅で気軽に健康チェック！

各種健康測定機器を使って、健康管理をサポートします。

体組成計



基礎代謝、筋肉量、推定骨量、内臓脂肪、体水分率などがわかります。メタボリックシンドロームで問題となる内臓脂肪量も一目瞭然です。推定骨量から、お年よりに見られる骨粗しょう症の予防にも役に立ち、また、筋肉量やバランスにより、お年寄りの筋力アップ運動や、転倒予防などをアドバイスします。

血圧計(脈波計付き)

血圧は健康のパロメーター。血圧と体重を毎日ばかり、自分の健康の目安をいつも携行しましょう。指先で血液の循環度合いも測定できます。



骨密度計



かかとで骨密度(骨の硬さ)を測定し、骨粗しょう症を予防します。自分と同年齢との比較や若年者とも比較できます。最近、若い女性でも骨密度が低い方も多く、必要なカルシウムの摂取をアドバイスします。

簡易心電図計

簡易心電図計は、親指の先をセンサーにのせて30秒待つだけで、心電図が取れる簡易測定機器です。心電図波形も印刷されますので、専門の先生への相談にも役に立ちます。



認知機能測定(タッチエム)



お年寄りが気になる、脳の認知機能を数値化して測定します。操作の簡単、座って開始ボタンを押せば、あとは機械の指示に従って進むだけです。終了したら、簡単な結果解説もあります。まずは、認知力チェックから、頭の健康に取り組みましょう。

ロボスキンアナライザー(全顔解析)

お肌は、からだの調子を現すパロメーター。健康の目安の情報がたくさんあります。そんなお肌の調子を、科学的に調べるのがロボスキンアナライザーです。男性女性を問わず、お肌のチェックで肌年齢を知り、①明るさ(くすみ)②しわ③しみ④毛孔の開き⑤もち肌(きめ)⑥水分(うるおい)の6つの指標で分析します。(10:00~12:00、13:00~14:00まで)



眼底カメラ



撮影した画像をインターネットを使って、眼科専門医(旭川医大)による遠隔健康アドバイスにより、失明の上位を占める緑内障や糖尿病網膜症、黄斑変性など、早期発見、早期予防につながります。(測定日:毎週水曜日、事前予約要)

ウェルネットリンクで健康管理

自分専用の健康マイページに、健診結果や健康チェックデータなどの健康情報を生涯にわたって蓄積、保存し、その情報を活用することで最適な健康ライフに役立てていただけます。(専用端末で簡単にご利用できます。※会員登録無料)



アンケート結果から健診へ

点数(スコア)が20以上の方には健診をお勧めします。

手順1: 点数結果について、後日、郵送でご自宅にお知らせします。



あなたのスコアは
「28点」
要注意!

(アンケートスコアが20点以上の方は、健診をお勧めします。)

手順2: るもいオリジナル健診の予約を受け付けます。(健康の駅)

健康の駅へ結果を持参ください。

① クーポン券をお渡しします。

緑内障等の
早期発見へ



② 希望者には、健康チェックと眼底測定(毎週水曜日)、簡易心電図測定により健康アドバイスを行います。



心房細動を発見して
脳卒中を予防します。

手順3: 留萌市立病院で血液検査を受診してください。(クーポン持参)

【血液検査】

- ・インスリンパワー健診
(隠れ糖尿病や本人の体質、危険なメタボを予測します)
- ・クレアチニン、HbA1c



慢性腎臓病リスク

糖尿病リスク

手順4: 後日、検査結果を郵送します。

るもいメタボリックアンケート

あなたの健康をセルフチェック

このアンケートは、留萌市立病院の笹川裕院長が札幌医科大学との共同研究により、7つの項目と身体情報による総点数から、高い精度でメタボリックシンドロームを予測可能なものとして開発しているものです。

自覚症状のない生活習慣病リスクの可能性を、スコア判定によりお知らせしますので
健診による早期予防とご本人の健康への気づきにお役立てください。

住所		年齢	
氏名		性別	
連絡先 電話番号			

【必ず記入ください】

身長		cm	体重		kg
腹囲		cm	(へその位置で測って下さい。ウエストではありません)		

【以下の当てはまる項目のどちらかに○を入れてください】

1. 両親、兄弟に糖尿病、心臓発作、脳卒中にかかった方はいますか？

はい	いいえ
----	-----

2. 医師により血圧が高いといわれたことがありますか？

はい	いいえ
----	-----

3. 血糖が高い、または尿に糖が出ているといわれたことがありますか？

はい	いいえ
----	-----

4. タバコを吸いますか？

はい	いいえ
----	-----

5. 1週間に3合以上のお酒を飲みますか？

※目安 日本酒 1合＝ビール約500ml

はい	いいえ
----	-----

6. あなたの食習慣について当てはまるものがありますか？

お腹いっぱい食べる。早食い。朝食を取らない。塩辛いものが好き。
味の濃いものが好き。

はい	いいえ
----	-----

7. 1週間にする運動は2時間より少ないですか？

はい	いいえ
----	-----

【アンケートについてのお問い合わせ】
留萌市花園町3丁目1-1 るもい健康の駅 (0164) 43-8121

るもいオリジナル予防・健診でいきいき健康管理！

あなたのカラダは大丈夫？

セルフチェック(アンケート)からはじまる健康管理・・・
自分のカラダを知ることが一番大切です！

るもいメタボリックアンケート在中

地域の元気は、家族、みんなの健康から



るもい健康の駅